

これからの  
働き方と

# 「しごとのみらい」

vol.01

## 人とは違うキャリアを積んできた 「変な人」から見える世界

特定非営利活動法人しごとのみらい  
サイボウズ株式会社

竹内 義晴 氏



### はじめまして。竹内義晴です

こんにちは。しごとのみらいの竹内義晴と申します。今回から『これからの働き方と「しごとのみらい」』というコラムを連載させていただくことになりました。

タイトルにあるように、私は周囲の人たちから「これからの働き方をしていますね」と言われることがあります。ここでいう「これからの働き方」とは、いわゆる「テレワーク」や「2拠点ワーク」「兼業・副業」「複数の組織に所属している」など、まだ多くの人が体験していない働き方です。

私は現在、新潟県妙高市でしごとのみらいというNPO法人を運営しながら、東京にあるサイボウズというIT企業でも働いています。また、妙高市グリーン・ツーリズム推進協議会では、妙高市のワー



妙高市で立ち上げている企業研修型ワーケーション

### PROFILE

竹内 義晴 (たけうち よしはる)

自動車会社勤務、プログラマーを経て、現在は妙高市でNPO法人しごとのみらいを運営。組織作りやコミュニケーションの企業研修や講演を行っている。また、東京のIT企業サイボウズにも所属。マーケティング・ブランディングに携わる。複業やテレワークなど、地域と都市部を往来しながらこれからの働き方を実践した経験から、2020年6月妙高市グリーン・ツーリズム推進協議会に参画。ワーケーションや関係人口構築の事業開発を行っている。

ケーション事業の立ち上げに関わっています。

私にとってこの働き方は「目指してきた」というよりは、「結果的にそうなった」形です。一方で、もし、私が実践しているような働き方をする人が地方、都市部に関らず増えたら、人口減少や人材不足をはじめ「地域や企業が抱えるさまざまな課題を解決できるのではないか」、やりがいや生きがいといった「働く人々が抱える“仕事に対するモヤモヤ感”を整理できるのではないか」など思うことが多々あり、こういった働き方を、無理に「広げよう」とは全く思いませんが、もし、こういった働き方を望む人や企業がいらっしゃるのであれば、一緒に手を組んで、何か形にできるといいなと思っています。

さて、今回の記事は、この連載初めての原稿です。私のことをよくご存知ない方もいらっしゃると思います。そこで、まずは私のことを知っていただきたいと思い、これまでの経歴についてお話しさせていただきます。

私は、新潟県妙高市に生まれ育ちました。父が自動車整備士だったこともあって、幼い頃から機械や自動車に興味があり、中学を卒業して、当時、横浜市にあった日産自動車の社内高校である日産高等工業学校に進学しました。その後、短大の日産テクニカルカレッジを経て、神奈川県厚木市にある日産テクニカルセンター(日産自動車の開発部門)で、アンチロックブレーキシステム(ABS)をはじめとした、自動車の電子制御部品の開発実験に携わってきました。

### このままじゃ 「帰るところ」がなくなっちゃう

入社して10年経った頃、ふと、地元新潟の事を考えた時、「このままだと、盆暮れ正月に帰る実家がなくなっちゃうんだな」と思いました。なぜなら、私は男3人兄弟ですが、進学や就職を機に、兄弟が全て実家を出てしまっていたからです。それから、地元に戻ることを考え始めて、「せっかく帰郷するなら、興味がある仕事をしてみたい」と思い、28歳の帰郷と同時にコンピューターのプログラマーになりました。

私はもともと技術系のことが好きだったこともあり、プログラマーの仕事が性にはまりました。大変なこともいろいろありましたが、「生涯、技術肌のプログラマーでいたい」と思うようになりました。しかし、30代になると「お前もそろそろマネジメントの仕事をやれ」と言われます。「まずい、このままでは管理職にされてしまう」と思い、32歳で転職しました。

転職によって、プログラマーの道を極められるはずでした。しかし、その転職が不幸のはじまりでした。なぜなら、私が配属された職場は「プレッシャーをかけて人を動かす職場」だったからです。ちょっとミスをすると、「それは、あなたにスキルが



プログラマーご出身の竹内さん

ないからだ」と言われる始末。今まで、とてもやりがいを感じていたプログラマーの仕事にも楽しさを感じられなくなり、気が沈む日々でした。

それからしばらく、がまんして働いていましたが、ある日、上司から「管理職をやってくれないか」と打診されました。「自分のことすらうまくマネジメントできないのに、管理職なんて絶対に無理だ」と思いましたが、当時、仕事に嫌気がさして独立することを考えていた私は、「よし、管理職の仕事にケリをつけて、この職場とは早くおさらばしよう」と決めて、管理職を引き受けることにしたのです。

### 人が行動する「源泉」は プレッシャーなんかじゃない

ストレスをかけて動かす職場だったため、同僚の中には、私以外にも心が折れそうになっていたメンバーもいました。自身の経験から「プレッシャーをかけるマネジメントでは、メンバーをつぶしてしまう」「せっかくなら、楽しく働くことができるチームにしたい」と思いました。でも、どうすればそれが実現できるのかが分かりません。いろいろと調べた結果、コミュニケーションと組織づくりを学ばなければいけないことに気づき、自費でセミナーに通いました。

学んだことは、職場で実践しました。すると、チームがことのほかうまくまわるようになったのです。以前は「何で竹内さんのチームは自発的ではな

いんですか？」と言われていたチームが、「竹内さんのチームがいるおかげで、うちの会社のシステムは回っているんです」と言われるようになりました。うれしかったです。

この経験を、多くの人やチームに伝えることで、もっと楽しく働く人が増えたらいいなと思い、その後起業してNPO法人しごとのみらいを立ち上げました。現在は、組織づくりやコミュニケーションに関する企業研修や講演、個人相談などを行っています。

## 妙高を拠点に東京の会社でも働く「週2日社員」に

2017年1月、SNSを眺めていたら、東京のIT企業サイボウズで「複業採用をはじめると」という内容の投稿を偶然みました。「複業」とは、本業の他にサブの仕事をする「副業」とは異なり、両方の仕事メインの働き方です。採用ページには「サイボウズの『チームワークあふれる社会を創る』という理想でつながり、一緒にチームワークあふれる社会を目指す仲間を増やしたい」「コミットできる範囲でいい」「経験や専門スキルを生かしませんか」と書かれていました。私は妙高市在住なので、どのような働き方になるかは分かりませんでした。理念には100%共感しましたし、チャレンジしてみたいと思いました。その結果、幸いにも採用していただくこととなり、今は新潟を拠点に、「フルリモート」



サイボウズ(本社:東京都)での勤務風景



研修型ワーケーションの1コマ。ビジネスで役立つ気づきを得られる

「週2日複業社員」という形で、サイボウズのマーケティングやブランディングの仕事に携わるようになりました。

このような働き方をはじめたすぐのことです。こんなことを思いました。「もしも、ボクの逆——つまり、地域の企業に、都市部の人材が複業することができたら、地域の人口減少や企業の人材不足をはじめ、さまざまな課題が解決できるのではないかと。その気づきを元に、地域複業に関する小さな取り組みを続けてきました。

また、フルリモートワークという働き方をきっかけに、妙高市役所から声をかけていただき、現在は妙高市グリーン・ツーリズム推進協議会にも所属。妙高市のワーケーション事業開発にも携わっています。

## 人とは違うキャリアを積んできた「変な人」から見える世界

このように、私は一般の人とは異なるキャリアを積んできました。それだけに「変わった視点」を持っているタイプだと思います。また、妙高と東京を行ったり来たりしながら働いている間に、地方と都市部の両方の視点を持った「変な人」になってしまいました(笑)。その分、「これからの未来は、きっとこんな感じになるんじゃないか」といったこ



拠点を置く妙高市の景観  
(いもり池)



妙高市の職場である「ハートランド妙高」

とは、人よりも感じやすいのではないかと、自分では分析しています。

さて、このコロナ禍によって経済は低迷し、世の中は大変なことになっています。一方で、「変な人」に見えているこれからの未来は「希望」です。たとえばテレワーク。妙高で仕事をしていると、テレワークをしている人なんてまわりにはいないし、「テレワーク、テレワークっていうけれど、そんな働き方をしている人なんて、本当にいるの?」といった声も聞こえています。でも、都市部の仲間と仕事をしていると、私たちが想像している以上に、多くの人がテレワークをしているし、在宅勤務も浸透していることに驚きます。この変化は本当にすごい。

また、テレワークが拡がると時間や場所の制約が少なくなります。「もし地域の企業が、今まで出会うことのなかった人材と出会える可能性が増えたら?」

「もし都市部の人たちが、仕事を通じて地域と都市部を行ったり来たりする関係ができたなら?」——つまり、仕事が「地域と都市部をつなげるきっかけ」になるのです。そんな仕組みを作りたい。

ここまでお読みになって、ひょっとしたらこんな風にお思いかもしれません。「そんなことは分かっているけど、それって単なる理想論だろ?」「机上の空論だろ?」——そうですね。確かに、単なる理想論かもしれません。それでも私は、仕事を通じて地域と都市部を行き来できる関係を作りたいと思っています。「昔はよかったよね」と愚痴りながら、地域が落ちていく姿を、ただ指をくわえて見ているわけにはいかないから。

この連載では、私が実際に体験したり、感じたりしたお話をしたいと思っています。読者のみなさまにとって、何かしらのお役に立つことができればうれしいです。引き続きよろしくお願いいたします。



「テレワークで働き方が変わっている」と竹内さん